

# 『古事記』神話における「兄妹婚始祖型」と

## 「天婚始祖型」の比較

岡部 隆志

以下の論考は、二〇一〇年八月に中国雲南省昆明市と開遠市にて開催された「兄妹婚神話と信仰民俗及び雲南省開遠市老勒村（イ族）人祖廟調査と研究の国際学術シンポジウム」（雲南大学、中国社会科学院民族文学研究所、雲南省開遠市人民政府及び日本・アジア民族文化学会共催）において発表した「古事記」神話中的<sup>1</sup>兄妹婚禁忌型神話<sup>2</sup>与<sup>3</sup>天婚始祖型神話<sup>4</sup>的比較研究<sup>5</sup>を文字に起こした原稿である。この発表の内容は、李子賢・李存貴編「形態・語

境・視野—兄妹婚神話与信仰民俗及雲南省開遠市彝族人祖廟考察与研究国際学術研討会論文集」（雲南大学出版社）に掲載された。また、中国で出版した拙著「神話与自然宗教」（中国語訳 張正軍 上海交通大学出版社）にも再録した。いずれも中国語による論（中国語への翻訳は張正軍）である。ただこの論の日本語による発表は、シンポジウム当日中国語の通訳を交えて発表した以外しておらず、日本語による文字化もしていない。

そこで、この文科紀要の場を借りて、中国での国際シンポジウムで発表した内容を掲載することにした。なお、文体が「〜です、ます」体になっているのは、口頭による発表をもとにした原稿による

ためである。この発表の趣旨は、中国少数民族に伝承されている代表的な二つのタイプの始祖神話の型が、「古事記」神話における高天原神話と出雲神話の始祖神話としてそれぞれ選択されており、その選択の必然を、両始祖神話の比較を通して明らかにするというものである。聴者は主に中国・韓国の研究者である。従って、そのような聴者を意識した語り口になっている。

### 1 「古事記」の二つの始祖神話

日本の「古事記」という書物には、日本の国家の起源神話が描かれています。実は、この神話には、日本を統一した大和朝廷の祖先に当たる神々を描く高天原神話と、大和朝廷に服属した、出雲地方の勢力である出雲の国の神話があります。これを出雲神話と呼びますが、「古事記」の神話は、この高天原神話と出雲神話との二つの神話ストーリーから成り立っています。

高天原神話とは、天地開闢から、国土の生成、神々の誕生を語るところから始まります。ストーリーの展開からすれば、地上の国の物語とされる出雲神話は、高天原神話のなかで生まれる神々の出来

事となりますので、高天原神話に含まれてしまいました。しかし、もともと、高天原神話は大和を支配した豪族が伝えていた神話であり、出雲神話は出雲を支配した豪族が伝えていた神話であって、別々の独立した神話であったと考えられます。出雲の国を服属させた日本を統一した大和朝廷は、出雲を服属させたという歴史的事実を神話に反映させた結果、自らの先祖の神々の起源を天地開闢から語り、出雲の国の神話を高天原神話のなかに組み込んだのだと考えることが出来ます。

出雲神話とはスサノオの八俣大蛇退治から、高天原へ国を譲るところまでですが、それ以外は高天原神話とみなすことが出来ます。出雲神話をさらに細かく見ていきますと、スサノオの物語、オオクニヌシであるオオナムチの物語、国譲りの物語の三つに分けられますが、スサノオは高天原の神でもあるということを考えると、出雲の国の王はオオクニヌシであり、出雲神話の実質はオオクニヌシであるオオナムチの物語と見ていいでしょう。

さて、この高天原神話と出雲神話にはいずれも、中国の少数民族が伝えている始祖神話と同型の始祖神話が見られます。高天原神話の始祖神話とは、イザナキ・イザナミの神話です。このイザナキ・イザナミは人格化された最初の男女神ですが、兄妹であるといえます。二人は結婚しますが、そのとき、互いに柱の周りを逆向きに回り、出会ったところで言葉を交わすということをしめます。そして子供を生みますが、最初に生まれた子供は水蛭子でした。異常児であり、葦船に入れて流してしまいます。

この神話は、中国の多くの少数民族が語り伝える兄妹洪水神話と

良く似ており、同系統の神話であることが指摘されております。例えば苗族が伝える典型的な兄妹洪水神話は、雷を人間がつかまえて檻にいますが、雷は脱出し復讐として洪水を起こします。兄妹が生き残り、兄が妹に結婚をせまりますが、妹は近親婚であるからと断ります。すると兄は大きな木を回りながら妹を追いかけ、急に向きを変えて妹をつかまえます。その結果生まれた子は手足のない子であったというものです。これは雷神復讐型として分類されているのですが、特に苗族に見られるものです（陳建憲「中国洪水神話伝説のタイプと分布」1996）。

同型の神話として、洪水の原因が雷神の復讐でないものや、また、大木の周りを巡るのではなく、石臼の上と下とを山から転がして、それがびったりと重なったら結婚する、というものもあります。生き残った兄妹が子供を産むことで人類が誕生するという展開において共通しますので、ここでは、この型を「兄妹婚始祖型」と呼んでおきます。この兄妹婚始祖型の神話と、イザナキ・イザナミの神話はとても良く似ています。日本の神話には洪水の部分が落ちていますが、通説のように、恐らく同系統の神話と見て良いと思われま

す。ただし、イザナキ・イザナミの神話は、最初から洪水のない形の神話であって、柱周りも婚姻儀礼の一つであり兄妹婚始祖型とは限らないとする説もあります（百田弥栄子「中国神話の古事記逍遙」2010）。大事な指摘ですが、最初に生まれた子が水蛭子という異常児であることなどから、ここではやはり、イザナキ・イザナミ神話を兄妹婚始祖型とみなしたいと思えます。

一方、出雲神話ではどうなのでしょう。オオクニヌシであるオオナムチは、兄弟達との争いに敗れ、スサノオの治める「根の堅州国」に逃れますが、そこでスサノオの娘スセリビメと結婚します。父のスサノオは婿であるオオナムチに対して試練を課します。まず、蛇や、ムカデ、蜂のいる部屋で寝るように命令しますが、妻であるスセリビメの助けによって切り抜けます。それから野原に打ち込んだ矢を探し出してこいと言います。野原にオオナムチが出て行くくと火を放ち焼き殺そうとしますが、鼠によって助けられます。結局、オオナムチは、スサノオの試練を克服し、妻スセリビメを連れて地上に戻り、オオクニヌシとなって国を作ります。つまり、この神話は、出雲の起源神話であるという見方もできます。

この話は、中国少数民族が伝える、洪水神話の「天人女房型」と言われるものとよく似ています。「天人女房型」の始祖神話は、イ族やナシ族に見られるものですが、ナシ族の有名な「人類遷徙記」は次のような展開になっています。人間の兄妹が結婚し大地を耕したことに神が怒り洪水を起こします。一人の善良な男であるツォゼルウが天の神の助言によってヤクの皮のなかに入って生き残りまゝ。ツォゼルウは天女と結婚し、天女は彼を天の父のもとへ連れて行きます。天神である父は、人間であるツォゼルウにいくつかの難題を課しますが、娘である天女の助けによってツォゼルウはその難題を克服します。そして、二人は地上に戻り夫婦として暮らすというものです（君島久子「中国の神話」1983）。このように地上の人間が天界の娘と結婚し民族の始祖となるという展開の神話をここでは「天婚始祖型」（櫻井龍彦「混沌からの誕生」1989）と

呼んでおきたいと思います。この型の神話は、今のところ西南中国では羌、チベット、イ、ナシ、プミ、トロン、リスなどのチベット・ビルマ語系の民族に見つかっています（櫻井龍彦「混沌からの誕生」1989）。ただし、李子賢「羌族洪水故事断想」『民間文学季刊』上海文艺出版社1986を参照した意見）。

オオナムチの神話には、イザナキ・イザナミ神話と同じように洪水の話が抜けていますが、天の娘と結婚しその父が与える難題を妻の助けによって切り抜ける、という展開はナシ族の「人類遷徙記」と同じです。つまり、中国少数民族の始祖神話である「天婚始祖型」の神話とみなすことが出来ます。

このように、日本の高天原神話と出雲神話には、中国少数民族に伝わる二つの系統の始祖神話がそれぞれにある、ということになります。日本の神話が中国の少数民族と良く似た神話を抱えていることは、これまでたくさん指摘されてきたことであり、特に目新しい指摘ではありませんが、高天原神話と出雲神話に、何故、二つの型の始祖神話があるのか、二つを比較しその意味について考察した研究は今のところありません。この発表ではそのことについて考えていきたいと思えます。

## 2 兄妹婚始祖型と天婚始祖型における対立と協調

まず、この二つの神話の型、一つは兄妹婚始祖型、一つは天婚始祖型ですが、それぞれどういう意味を持つ神話なのでしょう。

兄妹婚始祖型は、洪水の後に兄妹が結婚し人類の祖先となっていく話です。洪水の理由はいろいろありますが、多くは、最初の人類

創造に失敗し、神が洪水を起こして人類を滅亡させるといふパターンが一般的です。これは、洪水によってリセットし、もう一度人類創造をやり直す、というように理解できます。伊藤清司は、これを二度の人類起源と呼んでいます（伊藤清司「二度の人類起源」1988）。つまり、洪水後の兄妹の結婚は、二度目の人類創造であるということです。また、大林太良は、天地分離神話や洪水神話を、無秩序から秩序への移行であるとする松本由美の論を紹介し、イザナキ・イザナミの神話においても共通すると述べています（大林太良「日本神話の構造」1975）。

いくつかの神話の構造を分析すればある共通したモチーフを見いだすことができますが、兄妹婚始祖型の神話は、大きなモチーフとしては、大林太良が述べているように、洪水という無秩序から、人類社会の成立という意味での秩序への移行という構造になっています。例えば天地分離神話において、混沌という無秩序が、何らかのきっかけによって分離し、天と地という世界の秩序が出来る、という構造とそれは共通しています。

このモチーフにおいて重要なことは、無秩序から秩序へと移行する時に、対立という緊張をいったん構成し、その対立が解消される、という展開をとることです。松本由美はそれを「分離と結合」と呼んでいます（大林「日本神話の構造」）。ここではそれを「対立と協調」と呼んでおきたいと思えます。天地分離神話では、混沌という生死不明の状態から、天地が分離するという対立の後、天地の棲み分けが安定する（協調）ことで、生死が分離し、生と死、あるいは豊穡な世界の到来をもたらすという意味での秩序を構成し

ます。が、その秩序が乱れたとき、世界は洪水によって、もう一度リセットされ、兄妹婚始祖型のように、兄妹が男女という関係を取ること、いったん緊張した対立を構成し、その対立を克服して結婚する（協調）ことで、新たな秩序が生まれる、という展開になっているのです。

兄妹婚始祖型の場合、この世に残ったのは兄妹だけですから結婚しなければ人類は生まれません。しかし、結婚すればそれは近親相姦になります。従って、この男女という対立はかなりの緊張を孕むということになります。そこでその対立を克服するために、兄妹は様々な行動をとります。例えば石臼を上下別々に山から転がして上下が重なれば結婚するというのがそうです。これはある意味で神判と言えます。つまり、神の意志を問うことで人間の側の責任を軽くするという行為ですが、しかし、結婚の主體的な判断は人間の側に任されている、とみるべきでしょう。一方で、神の意志を問うのは違つて、兄妹のどちらかが策略をめぐらして結婚せざるをえないように仕組む話がけっこうあります。苗族の神話のように、大木の周りを逆向きに回る話がそうです。このパターンに注目するのは、人間である兄妹自身の知恵によって問題を解決していることで、そこに神の助けが入っていないことです。これは注目していいのではないかと思えます。

いずれにしろ、兄妹婚始祖型においては、男女という対立を克服する、つまり協調への展開において、神の関与はそれほどではないということは言えます。この型の神話は、洪水後の二度目の人類創造に於いて、まず男女の対立という、人間社会を構成する普遍的な

対立の構造が示されたということ、そして、神が余り関与せず人間の力によって秩序が作られていく、という展開になっているということを指摘しておきたいと思います。

また、この型を語る始祖としての兄妹は抽象化された存在である、ということも重要ではないかと思えます。例えば、苗族の兄妹婚始祖型である「生き残った兄妹」では、洪水後生き残った兄妹は肉の塊を生み、その肉の塊を切り刻んで包んだところ、その包みが地上に落ちて、肉の一つ一つが人間になって人類が増えていったと語ります（君島久子編「中国の神話」）。また、同型のリス族の「創世記」では、兄妹は九人の男の子と七人の女の子を産みますが、九人の男の子は九つの違う言語を持つ民族になったと語っています。そして、「天下の人類の誕生は一つの瓜から生まれた」と最後に語ります（君島久子編「中国の神話」）。このような語り口から、この神話を語る民族にとって、兄妹という祖は、人類の祖先というようにより抽象化された始祖として語る傾向があると思われれます。天婚始祖型にもこのような語り口はみられるのですが、例えばナシ族の「人類遷徙記」では、兄妹の三人の子は、長男はチベット語、次男はナシ語、三男はミンチャ語を話し三つの種族になったと語りますが、人類の始祖というよりは、ナシ族の周辺に住む民族の始祖譚として語られており、その意味では、天婚始祖型の始祖は、人類の始祖というほどに抽象化されていないということが言えるでしょう。兄妹婚始祖型において、兄妹の始祖が抽象化されているのは、やはり、洪水というリセットによって神々も含めたそれ以前の世界から切り離されたからであり、その意味において、人類という普遍的な

カテゴリーのなかに始祖を位置づけしやすいのだと思われれます。

それに対して、天婚始祖型の神話の場合はどうでしょうか。天婚始祖型の場合、洪水後に生き残るのは一人の男であって、兄妹ではありません。まずここが決定的に違います。従って、男は人間の娘とは結婚することが出来ず、天の神の娘と結婚するという展開になります。

とすると、ここでの対立とは、人間の男と天の神の娘との対立、ある意味では、男女の対立ということになってもいいのですが、そうはなりません。男は、妻の父である天の神によって様々な試練を受けます。つまり、この型の神話での対立とは、人間の男と天の神（義理の父）との対立ということになります。この対立の克服は、天の神と人間の男との間に入った、天の神の娘の助力によって成し遂げられます。人間の男の英雄的な力によって、天の神の試練を克服するという展開ではありません。とすると、兄妹婚始祖型と、この天婚始祖型の違いとはいったいどのようなものなのでしょうか。

兄妹婚始祖型では、男女の対立と克服がテーマだと言えますが、天婚始祖型では、神と人との対立と克服がテーマなのだと言えます。兄妹婚始祖型は、人類の再創造において、神の関与が少なく述べました。が、天婚始祖型では、人類社会の再創造において、神がかなり深く関与していると言えます。そこが違いと言えます。

この違いをどう意味づけたらいいのでしょうか。このような神話における神とは、西欧の神のような絶対神ではなく、自然そのものを神とみなすアニミズム的の神であると言えます。従って、ここでの

神の関与とは、人間の社会における自然の関与の違いだと捉えることが出来ます。例えば、天婚始祖型において、神が与える試練は、樹木の伐採とか、開墾、種まきといった課題が多く、焼畑農耕社会を反映していると指摘されています。義理の父である神との対立の克服は、いわば神が営んでいた焼畑農耕を難題として出されそれを人間がやり遂げるという展開になっているわけです。つまり、この神話の背景には、焼畑農耕という、生産性が低く自然に左右される度合いの大きい農耕形態を営む社会が想定できます。

それに対して、兄妹婚始祖型では、特に焼畑農耕を思わせる場面は出てきません。ただ、この型の神話、特に雷神復讐型などが苗族に伝承されていることに着目すれば、苗族は、元々長江流域の稲作民族だと言われておりますので、稲作文化を持つ社会を背景にしているとも考えられます。ただし、苗族にも始祖型を持たない天婚始祖型の伝承（例えば「牛飼いダリェと天女のヤチェ」）はあり、また稲作ではなく焼畑農耕を生業形態としていた民族、例えばリス族やヌー族なども兄妹婚始祖型の神話を伝承していますので、この二つの神話の型とそれを伝えている少数民族の生業形態が一致しているというわけではありません。

ただ、ここで言えることは、天婚始祖型の神話が自然への依存度の高い焼畑農耕をモチーフにしていることから、この型を伝承する社会にとって、自然との関係が大きなテーマになっているということです。つまり、神との対立と協調は自然との対立と協調でもあるわけです。それに対して、兄妹始祖神話は、自然との関係はそれほどテーマになつていないということになります。

### 3 高天原神話と出雲神話における始祖神話の違い

さて、そのように考えた場合、この二つの神話の型が、日本の高天原神話と出雲神話にある意味とはどういうものなのでしょうか。言い換えれば、高天原は兄妹婚始祖型を、出雲神話は天婚始祖型を何故選択したのでしょうか。

まず、言えることは、どちらも洪水の部分が抜け落ちていたということだと思います。この意味は、日本の神話はリセットの必要がないからと言えます。つまり、高天原神話も出雲神話も、リセットした後の二度目の起源を語るものではないということです。これは、日本の神話が最初から神々の間での物語として展開しており、神と人間という対立構造をとらないということとかわっています。特に高天原神話では、天地開闢以降の神々や国土の生成の流れの一環としてイザナキ・イザナミ神話がありますので、洪水を起こしてリセットする必然性が最初からないわけです。出雲神話においては、洪水の後オオナムチが生き残るといふ展開はありません。むしろ、オオナムチが二度の死を体験し、その結果としてスサノオのいる異界である「根の堅州国」に行くことになっています。ここでリセットされるのはオオナムチであり、その意味では、主人公の住む世界そのものをリセットする洪水という出来事は必要とされていません。

それではこの二つの型の違いですが、高天原神話が兄妹婚始祖型であるイザナキ・イザナミ神話を選択していったのは、まず、男女という対立とその克服（協調）が神話の展開において合理的と判断されたからだと言えます。特に、イザナキ・イザナミが相手を誘う言葉の意味であり、また、二人が柱巡りをして発する言葉が、「あ

なにやしえをとこそ」「あなにやしえをとめを」という男女が相手を替め合う言葉です。これを歌垣の男女の出会いとみなすことも出来ます。つまり、高天原神話は、国土や神々を生むことにおいて、男女という対立と協調を選んだわけです。これは、男女が結婚し子供を産んで社会を形成していくという、人間社会の普遍的な原理を人類起源にあてはめたものであり、そこからは、神と人あるいは天と地上という緊張した関係は見えませんが、その意味において、高天原神話は、人間的な社会の原理が神々の原理として当初から貫かれているのだと言えます。

従って、すでに兄妹婚始祖型における始祖の特徴として指摘したように、イザナキ・イザナミはかなり抽象化された存在として語られていると言えるでしょう。

また、この二つの型を伝承する社会の自然への関わり、というように見ていくと、高天原神話は稲作を主たる生業形態とする大和朝廷の社会で語られた神話ですので、焼畑農耕的な面影のある天婚始祖型を選択しなかったのはある意味で当然であると言えます。

それに対して、天婚始祖型を語る出雲神話についてはどうでしょうか。この神話では、男女の対立ではなく、妻の父であるスサノオと婿であるオオナムチの対立が描かれています。スサノオは「根の堅州国」という異界の王です。オオナムチはまだ未熟な地上の神ですが、ここでのスサノオとオオナムチとの対立は、中国少数民族が伝える天婚始祖型における天の神と人との対立とみなしていいと思います。

つまり、ここでは、男女ではなく、異界の神と人との対立とその克服が描かれていると言えます。婿である子が異界の神であるスサノオを完全に克服するのではなく、異界の王である神の試練を乗り越え、その神の力を継承して成長し、出雲の王オオクニヌシとなる、と展開していくわけです。

出雲神話において、王であるオオクニヌシの起源の物語としてこの天婚始祖型が選択されたのは、出雲の社会において、異界の神と人との対立と協調という関係がずっと続いていたということだと考えられます。異界の神を自然の人格化とみなせば、それだけ、出雲においては人の社会が自然に依存しているということであり、人と異界との距離が近いのだと言えるでしょう。

ところで、櫻井龍彦は、広くチベット・ビルマ語族に分布するこの天婚始祖型の神話は、古い時代にイ族やナシ族の宗教者であるピモヤトンパによつて経典というテキストに載せられていったのだらうと述べています。そして、その神話に彼らの祖霊信仰を複合させ民族のアイデンティティを高める機能を作り出したのだと述べています（櫻井龍彦「混沌からの誕生」1989）。つまり、イ族やナシ族が伝えるこの型の神話にとつて、ピモヤトンパが重要な役割を果たしているというのです。例えばナシ族の「人類遷徙記」では、地上に戻った天神の娘とツォセルウの夫婦は、トンパを尋ね祭天の儀礼を行ったとあります。またピモは、実際の先祖祭祀の際にイ族の創世神話を誦しますが、その神話にはピモが重要な役割を持って登場するものがあり、その神話を語るピモを権威づけるものになっています。

この指摘はなかなか興味深く、このように、ナシ族やイ族の始祖神話が先祖祭祀のテキストになり、さらに、そのテキストを伝える民族の経典となったり、あるいはそれを語る宗教者の権威を高めるというのには、天の神と人間とが父子という関係でつながる天婚始祖型だから可能なのだと思われれます。それは、神の権威がそのまま人間に直接受け継がれるからです。その権威は当然、神と人をつなぐ宗教者であるピモヤトンバの権威ともなります。

つまり、呪術的宗教祭祀を司るピモヤトンバのような存在が、権威として人々から尊敬される社会がそこに想定出来ます。それは族長が呪術的な力を権威とする祭祀王であるような部族国家と同じ社会なのだと言ってもいいでしょう。呪術宗教祭祀を担うものが権威を持つ部族国家にあつては、神の力を人が直接受け継ぐような天婚始祖型の神話はとても適したのですが、兄妹婚始祖型は、始祖の始まりは人間の男女であり、しかもかなり抽象化された存在です。で、神話としては適さないということになります。

このように考えたとき、出雲の国の始祖オオクニヌシが、異界の王スサノオの力を継承して王となつていったという始祖神話を抱えているということは、出雲が、呪術祭祀者を王とするかなり古い段階の部族国家だとも考えられます。実は、このオオクニヌシすなわちオオナムヂの天婚始祖型神話は、シャーマンの成巫儀礼だという解釈があります。諏訪春雄はオオナムヂが「根の堅州国」から脱出するとき、持ち帰る「生太刀・生弓矢・天の詔琴」はシャーマンの呪具であり、長江流域の少数民族のシャーマンが用いる法器（呪具）の中に、剣、弓、楽器があることや、イニシエーションの一つ

に、昏睡状態の中で地下遍歴がある（ヤオ族の成巫儀礼）ことなどをあげ、このオオナムヂの神話と少数民族のシャーマンの成巫儀礼との関連を指摘しています。（諏訪春雄「日本王権神話と中国南方神話」）。

つまり、出雲の王はナシ族のトンバやイ族のピモのような呪術宗教者だつたと考えられるのです。その宗教者の始祖神話がオオナムヂの神話すなわちオオクニヌシの物語ということになるわけです。

『古事記』の高天原神話では黄泉比良坂は「今、出雲の国の伊賦夜坂と謂ふ」とあるように、黄泉国が出雲にあると語っています。これは大和朝廷が作ったフィクションというよりは、実際に、出雲の国が、呪術的な宗教祭祀を担う者を権威とした社会であつたからこそ、大和王朝からは、異界的な地域に見えたということでしょう。

従つて、出雲が呪術宗教者を王として戴く古い部族社会であるからこそ、出雲はこの天婚始祖型の神話を選択したのだと言えます。

オオナムヂの神話において、スサノオがオオナムヂに与える試練は、矢を大野に放ち、それを探させている時に火を放つというものです。野を焼くという点では焼畑の面影はありますが、むしろ、出雲神話では焼畑農耕をモチーフとした難題は落ちて見ると見るべきでしょう。ここでは歴史的に出雲が実際どのような生産形態を持ち、政治形態はどうであつたかの考察は省きます。ただ、オオクニヌシの描かれ方や、天婚始祖神話を選択している等の理由から、呪術宗教者を王として戴く部族社会ではなかつたかと考えておきます。その意味では、自然としての神に強いつながりをもつた社会で



あり、政治や宗教という觀念の領域において、自然への依存度は高かったのだと言えるでしょう。

#### 4 まとめ

高天原勢力と出雲の勢力とはやがて衝突し、結局、出雲の王オオクニヌシは高天原の勢力に服属することを誓います。つまり、兄妹婚始祖型の始祖神話を持つ勢力と、天婚始祖型の始祖神話を持つ勢力が衝突するわけです。結果として、兄妹婚始祖型の勢力である高天原が勝利します。これはある意味で当然な歴史の流れだと言えます。何故なら、兄妹婚始祖型の、男女の対立と協調というテーマを起源とする社会は、それだけ自然から自立する度合いが高いと考えられるからです。自然から自立する度合いが高いことは、文明化の度合いが高いということであり、軍事力を含めた世俗的な権力を強化できるからです。

例えば、高天原ではタカミムスヒ（高御産巢日）が中心になって神々と合議して高天原に起こった様々な危機に対処します。アマテラスは高天原を統合する中心的な神ですが、その存在は自然的性格であり宗教的権威そのものであると言えます。一方、タカミムスヒは世俗的な権力を持つ神になります。また、国譲りを実現させるタケミカヅチという武力を専門とする神が登場します。つまり、高天原では自然神と世俗神が分離し役割分担がなされていて、世俗的な権力の神が自然神であるアマテラスを補佐し政治システムの中心を握るという合理的な支配システムができていくわけです。

天婚始祖型の神話を持つ出雲は、自然（神）との対立と協調を

テーマとした社会であると考えられ、その意味では自然から自立する度合いは高くなく自然との関係を引きずります。王であるオオクニヌシは、国譲りの勧告に自ら答えることができずに、コトシロヌシとタケミナカタの二人の息子に判断をゆだねます。この二人は合議するわけでも無く、あっさり（タケミナカタは多少抵抗しますが）タケミカヅチに服従します。この経過を見ると、出雲は、自然神を象徴する宗教的な王の力と世俗的な権力を代表する力とが明確に区別されておらず、高天原のような強い勢力の前では、ひとたまりもなく降伏する脆弱さを持っていることがわかります。

従って、兄妹婚始祖型の神話を抱く社会が、天婚始祖型神話を抱く社会と衝突すると、兄妹婚始祖型神話を抱く社会が勝利するのは当然だと言えるでしょう。

『古事記』の神話は、地方豪族を統一した大和朝廷という国家が、地方豪族のいくつもの神話を国家の起源を語るストーリーに組み入れたという面を持っています。従って、天婚始祖型は出雲に伝えられていた出雲神話の一部であると思われませんが、大和朝廷が『古事記』を編纂した段階で付け加えた可能性も否定出来ません。いずれにしろ、本来、一つのストーリーとして並ぶことの無いはずの二つの始祖神話が、敵対する勢力のそれぞれの始祖神話として並ぶことになったのです。そして、国を統一した側が兄妹婚始祖型であり、服属した側が天婚始祖型であるというように、二つの型の始祖神話は明暗を分けました。ただし、このことはこの二つの神話の型を伝える中国の少数民族において、片方が国家を統一し、片方は服属する側だということを意味するわけではありません。二つの神話の型

が一つの神話のストーリーにまとめられているのは、国家を形成し諸地域の神話を取り入れた日本の神話の特殊性だと考えるべきです。

以上、高天原神話と出雲神話のそれぞれの始祖神話の違いを、中国少数民族の兄妹婚始祖型と天婚始祖型の二つの始祖神話の違いを通して説明してきました。そして、その説明によって、兄妹婚始祖型の神話を抱く大和王権が、天婚始祖型神話を抱く出雲の国を支配していくことは、必然的な展開であるということ論じてきました。

#### 参考文献

- 岡部隆志「古事記」神話中的の兄妹婚禁忌型神話と天婚始祖型神話の比較研究（中国語訳 張正軍・張彬）李子賢・李存貴編「形態・語境・視野―兄妹婚神話と信仰民俗及雲南省開遠市彝族人祖廟考察与研究国際学術研討会論文集」所収 雲南大学出版社 二〇一一年十二月
- 岡部隆志「神話与自然宗教」中国語訳 張正軍 上海交通大学出版社 二〇一六年
- 陳建憲「中国洪水神話伝説のタイプと分布」「日中昔話伝承の現在」勉誠社 一九九六年
- 百田弥栄子「中国神話の古事記逍遙」「アジア民族文化研究九号」アジア民族文化学会 編 二〇一〇年三月
- 伊藤清司「二度の人類起源―中国西南少数民族の創世神話―」君

島久子編「東アジアの創世神話」弘文堂 一九八九年

櫻井龍彦「混沌からの誕生」君島久子編「東アジアの創世神話」弘文堂 一九八九年

弘文堂 一九八九年

大林太良「日本神話の構造」弘文堂 一九七七年

君島久子「中国の神話」筑摩書房 一九九六年

諏訪春雄「日本王権神話と中国南方神話」角川書店 二〇〇五年